

人とあるに同じ、

〔萬葉集古十一相聞往來歌〕正述心緒

希將見君乎見常衣左手之執弓方之眉根搔禮略 中

眉根搔下言借見思有爾去家人乎相見鶴鴨

或本歌曰眉根搔誰乎香將見跡思乍氣長戀之妹爾相鴨

一書歌曰眉根搔下伊布可之美念有之妹之容儀乎今日見都流香裳略 中

問答

眉根搔鼻火紐解待八方何時毛將見跡戀來吾乎

右上見柿本朝臣人麿之歌中但以問答故累載於茲也

作眉

〔伊呂波字類抄末體〕黛亦作麿眉黛

〔增補下學集上二體〕黛マユヅク詩格註畫眉墨也釋名滅去

〔書言字考節用集五體〕黛眉毛以此代之故謂之黛去

〔倭訓栞末編二十四〕まゆすみ 和名抄に黛をよめり又玉篇に鬢以松烟畫眉也と見え神代紀に

眉上生蚕とあるより出たり歌にますみとも謠にまゆねくろきともみえたり庭訓に小柴黛と

みゆ小柴は所の名にや藻鹽草に炭山伊勢神手向とみゆ多氣郡北藤原村より黛を貢すといふ

其所をけふりそといへりそは所なり

〔山賤記〕朝夕につかうまつりなれたる女房などさらに物おぼえたるもなしかきくらす涙の色

ふかくとりのまゆすみもあとなき面がはりいつしかあはれに見給ひて心のうちども思ひや

られ侍り、  
〔宗長手記〕越年は薪酬恩庵傍捨蜜下爐邊六七人集て田樂の鹽噌の次で俳諧度々に略 中